

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 9 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520379

研究課題名(和文)ボヘミア文学史・民俗誌記述におけるローカリズムの位相

研究課題名(英文)Aspects of localism of literary history and ethnography in Bohemia

研究代表者

三谷 研爾(Mitani, Kenji)

大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号：80200046

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題は、ナショナリズム対立が深刻化だったボヘミアを対象とし、1890年代から両大戦間にかけて書かれた同地の文学史的・民俗誌的記述を検証したものである。ザウアー、ハウフェンなどのドイツ系知識人による、地域性を重視する文学史は、理念においては国民文学史を相対化する契機を含みながら、具体的記述としてはナショナリスティックな本質主義の思考を強く主張する結果となった。他方、チェコ系知識人ホスチンスキーもまた、その民族芸術論をとおして、文化の移動の生産性に注目しながら、民族文化の恒常性に固執した。同地における文化的越境現象は、人文学的ディスコースのこうした構造と並置して理解すべきことが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to investigate discursive characters of historiography on literature, culture and folklore of Bohemia from 1890s to the interwar period. German intellectuals there, such as August Sauer and Adolf Hauffen, propose a new type of literary history with the emphasis on regional conditions, which can relativize the national literature as a dominant frame of reference in 19th century, is marked clearly by the national essentialism as a matter of concrete depiction. In his writings on the folk art Czech critic Hostinsky holds the stale continuity of national culture, in spite of his focusing on the cultural mobility and hybridity. The high productivity of the modern art and literature at the turn of the century in Bohemia must be discussed in the discursive configuration of academic humanities and non-academic cultural innovations.

研究分野：ドイツ・オーストリア文学

キーワード：地域性 ナショナリズム 文学史 ボヘミア ザウアー ハウフェン ナードラー ホスチンスキー

1. 研究開始当初の背景

中欧の典型的な多言語・多民族地域であったボヘミアは、19世紀後半から20世紀前半にかけて、きわめて深刻なナショナリズム対立を経験する反面、汎ヨーロッパ的な芸術モダニズムの有力な拠点となった中心都市プラハからは、文化的越境・共生の試みが多くあらわれた。従来の研究はこの後者の側面に光を当ててきたが、同地で展開された制度的な人文学研究は、ナショナリズムに規定された硬直した学知として閉却されてしまい、いまもって十分な検証がおこなわれていない。こうした学知の内実をあらためて確認し、芸術モダニズムの潮流とともに視野に収めることで、多言語地域ボヘミアの文化史的位相を立体的に理解することが新たな研究課題となってきた。

2. 研究の目的

19世紀後半から20世紀前半のボヘミアにおいて、主として大学において展開された制度的な人文学研究に着目し、とりわけボヘミア地域そのものを対象とした文学史・民俗誌記述を取り上げる。そこでは、ボヘミアという地域を対象とすることによって生じるローカリズムとナショナリズムがせめぎあっており、その両者の相関関係が学知としていかに提示されているかを、理念的なレベルと具体的な記述のレベルの両面から探求する。それによって、同地域に関する学術的な理解の様相を、ドイツ側とチェコ側の双方を対比しつつ明らかにし、当時の人文学知の意味と限界を検証する。

3. 研究の方法

ドイツナショナリズムとチェコナショナリズムの対立が深刻化するなかで、民族別に分割されたプラハ大学において取り込まれた、ボヘミア地域文学史・民俗誌研究に焦点を当てる。ドイツ側については、文学史家アウグスト・ザウアーの『文学史と民俗学』を中心に、その地域文学史構想の内実を検証する。そのうえで、民俗学者アドルフ・ハウフェンによるボヘミア民俗誌、さらには文学史家ヨーゼフ・ナードラーの『ドイツの種族と風土の文学史』における具体的な記述を分析し、そのディスкурールの特性を明らかにする。他方、チェコ側については、美学者オタカル・ホスチンスキーによる論考『民族と芸術性』ならびに『ボヘミア俗謡』を取り上げ、そのディスкурールの特性を確認する。これらの検証作業をとおして、ドイツ側およびチェコ側における、ボヘミア地域にかかわる人文学知の意味とその射程を考察する。

なお、分析対象となるこれらの主要テキスト、ならびに関連する雑誌・新聞資料は、ベルリン国立図書館、オーストリア国立図書館、プラハ国立図書館などにおいて集中的に文献調査をおこなって収集する。

4. 研究成果

・中世後期以来、ボヘミア地方の中核的な学術センターであったプラハ大学は、深刻化するナショナリズム対立のなかで、1882年にドイツ系とチェコ系に分割された。この分割にいたる大学史的背景を確認するとともに、分割後の両大学でボヘミア地域文化研究が、当初は文学研究、さらには民俗(族)学研究というかたちで定着し、制度化されていったことを明らかにした。

民俗学の展開過程においては、チェコ側が博覧会の企画・実施、また各地での民俗資料の収集と保存という社会運動をともなったのにたいし、ドイツ側は大学を中心に、自由主義的ブルジョワの各種アソシエーションが協力するという態勢がとられた。

・ドイツ・プラハ大学で文学史研究を担当したザウアーの『文学史と民俗学』は、ローカリズムの視座からナショナリズムを相対化する可能性を秘めながら、結局は本質主義的な「民族性(国民性)」論に帰着するという論理を展開している。この論理は、ボヘミア各地に散在するドイツ系住民のローカルな文化的多様性を、言語文化に宿る「民族性」によって統一的に把握する僚友ハウフェンのドイツ・ボヘミア民俗学構想と表裏一体の関係にある点を確認した。

なお、ザウアーのこうした構想が、20世紀初頭からようやく本格化した、日本における制度的文学研究の形態ときわめて近似していることも明らかとなった。そこには、当時ドイツ語圏において活発に論じられていた文学史の意義の問題が影を落としていると推定される。

・19世紀末のドイツ民俗学における学問原理をめぐる論争を睨んで提起されたザウアーの文学史プロジェクトは、弟子ナードラーによって血統主義的に解釈され、ナチズム的な諸原理とも親和性を帯びるにいたった。にもかかわらず『ドイツの種族と風土の文学史』のなかのボヘミア地域にかかわる記述からは、ドイツ/チェコ/ユダヤの三つの言語文化の交渉ないし混淆によって、この地域の文学が展開していったことが否みがたいことが看取される。ナードラーも、とりわけユダヤの伝統との相互交流が、この地域のドイツ文学に独特の相貌を与えていることを明言せざるをえなかった。

・チェコ・プラハ大学の指導的研究者のひとりホスチンスキーは、芸術における「民族性」を素材ではなく、方法の問題と理解することにより、芸術表現の歴史性や可塑性を視野に収める一方、母語のうちに集約的にあらわれる民族精神の存在を強く主張した。ホスチンスキーは後年、『ボヘミア俗謡』において、文献学的な民俗音楽研究の手法を確立するとともに、個別の歌謡が言語的境界を越えて

伝播していく事例をも実証している。しかしその反面、ホスチンスキーは民俗精神の不変性・恒常性をも説き続け、ザウアーやハウフェンの言説に見られるのと同種の、内在的な矛盾を解消するにいたらなかった。

・19世紀末から20世紀初頭、ドイツ側ならびにチェコ側における人文学研究は、いずれもボヘミア地域の複数文化的環境を意識し、そこにナショナルなものに回収しきれないローカルなもの可能性を見出しつつ、最終的にはナショナルアイデンティティの護持を主張した。ディスクールにおけるそうした対称性は、専門を同じくする研究者のあいだの人的交流を可能にしたはずのものであり、目下とりわけチェコにおいて一次資料の発掘により、さらなる検証が進みつつある。世紀転換期当時、プラハあるいはボヘミアにおいてはチェコ社会とドイツ社会は完全に分断されていたという従来からの見解には、一定の再考が必要であると思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

三谷研爾・中村真、「19世紀ボヘミアにおける民俗学的思考の変容 ホスチンスキーの言説を手がかりに」、大阪大学文学研究科紀要、55、2015、pp.43-59、査読なし

MITANI, Kenji、“Literaturforschung als moderne Wissenschaft“、独文学報、30、2014、pp.5-23、査読あり

三谷研爾、「民族対立のなかの学知 アウグスト・ザウアーの地域文学史構想」、叢書コンフリクトの人文学、4、2012、pp.41-60、査読あり

中村真、「せめぎあう「民謡」概念 『モラヴィア恋歌集』の編纂をめぐるレオシュ・ヤナーチェクとズデニェク・ネイェドリーとの対立」、叢書コンフリクトの人文学、4、2012、pp.61-81、査読あり

[学会発表](計4件)

中村真、「第一次世界大戦がプラハのチェコ人社会へ及ぼしたインパクト」、日本音楽学会東日本支部研究例会(桐朋学園大学) 2014.12.13

MITANI, Kenji、“Literaturforschung als moderne Wissenschaft in Meiji-Japan”、Universität Heidelberg、2013.07.09

三谷研爾、「ザウアーと地域文学史」、現代オーストリア研究会(龍谷大学)、2012.06.16

NAKAMURA, Makoto, "The Concepts of the "Folksong" in Conflict: the Aesthetic Context of Leos Janacek's Folksong Studies", The British Association for Slavonic and East European Studies 2011, University of Cambridge、2011.04.04

[図書](計2件)

三谷研爾、『境界としてのテキスト カフカ・物語・言説』、鳥影社、2014、253ページ

MITANI, Kenji (ed.)、"Between 'National' and 'Regional'. Reorientation of Studies on Japanese and Central European Cultures", School of Letters, Osaka University、2012、pp.102

[産業財産権]

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

三谷研爾(MITANI, Kenji)
大阪大学・文学研究科・教授
研究者番号：80200046

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

中村真 (NAKAMURA, Makoto)